

絶滅が危惧される越後の植物：

ハマナス、オミナエシ、サネカズラ、トケンラン

石 沢 進



ハマナス：佐渡郡相川町達者 1998 5 30



オミナエシ：水原町大日原 1997 9 11



オミナエシ：水原町大日原 1997 9 11



サネカズラ：新津市金津 1997 11 11



トケンラン：佐渡金井町新保 1987 6 4

植物が絶滅する要因には、いろいろの場合があり、その理由を明確にして保護の対策を立てる必要がある。しかし、多くの場合その要因は単純ではなく複雑に絡み合って絶滅に追いやられることになっている。

新潟県における絶滅危惧種の選定を行い、それぞれの種について危惧される要因の検討を行う時期にある。今回収録した前頁ハマナス、オミナエシ、サネカズラ、トケンランについても絶滅に至る要因が異なると考えている。

ハマナスは、海浜植物であり、海岸の砂丘に結びついて生活している。その種が絶滅の方向に進行し、個体数を減少させている。その背景には、人間の生活圏の拡大が主な要因として指摘できる。新潟県は海岸線の長い県として知られ、海岸線を自動車でもなかなか県内から脱出できない経験を持っている人が多いと思う。それほど長い海岸線を有する新潟県には、海岸砂丘が残っており、海浜植物が多く茂っていると考えがちである。しかし、北から南まで、自然の状態に残されている海岸砂丘はほとんどないと言ってよいほど、利用されている。道路建設、海水浴場の整備、高波を避ける護岸工事、魚貝類の捕獲して搬入する湾岸整備と次々と無計画に自然の海岸線が消失しているのが現実の姿である。一昨年まで綺麗な瀬波海岸の自然豊かな地域も最近の護岸工事でその姿を失ってしまうなど、極めて急速に自然状態の海岸線の破壊が進められている。従って、自然状態の砂丘に生育している海浜植物は次から次へとその数を減らしている。ハマナスをはじめ、セナミスミレ、ハマベンケイソウ、ハマハコベ、ハマエンドウ、ハマゼリ、ピロウドテンツキなど多くの事例がある。

オミナエシは、山地の草原に生育している植物で、秋の七草の一つとして、古来より親しまれてきたが、近年山地ですっかり見られなくなっている。8月のお盆の時期にお墓に備える花として、欠かせない植物であったが、最近では野生のものを採取してお墓に飾れるほどに群生しているところは、県内では皆無と言ってもよい。かつて多数みられた植物が減少している要因の一つには、草地の減少があげられる。50年ほど前には家畜の飼育に山地の草を刈り取って飼料として使用することで、草地が維持されいた。また、カヤを使った屋根葺きの習慣があり、カヤ場と称して草地を守ってきたが、最近では、山地で草を刈る作業がほとんどなくなり、かろうじて道路沿いの草を刈ることもあるが、多くの場合、人工的な方法では手数がかりすぎるので、かなり強烈な除草剤を散布するので、ところによっては道路沿いが裸地化して、草も生育していないところさえある。人工飼料や新建材の普及により、山地の草の利用がほとんど行われなくなってきた。昔の里山は人の利用によって維持されてきたが、現在里山に近づく人工が激減している。このような自然の恵を利用する方法が大きく変わってきている。そのような状況で生存し続けた植物があり、その利用方法の変化によって繁殖できない環境へと変化してしまったと推測される。人との生活の習慣に係わり合いを持って山地に生育していたとみられる一例が、オミナエシであり、山地における人の利用の仕方の変化で消失の方向に進んでいるとみてよいと思う。同じ様に減少している植物には、オ

キナグサ、キキョウなどがあげられる。

サネカズラは、県内でも数箇所にしかな分布していない稀産の種である。もともと暖温帯の種であるから、南の県では極く普通の珍しい種でない。一般に暖温帯の種は北地では、生育が稀になり、生育出来ない限界に達する。サネカズラはその一例であり、新潟県においては稀産の種とみなされる。そのような種はその生育地を改変しないで、自然の状態を保っていると結構長い間、生き続けることができる。しかし、とかく「珍しい」と評価が指摘されると、その生育地から移植してみたいという人の心理が働き、生育地の破壊につながるものが植物にはよくある現象であり、生育地の公表を控える場合が多い。一方生育地がはっきり解らないと、貴重な種が生えているとは知らなかったということで、その生育地が一瞬にして失われてしまうこともある。稀産種の詳しい産地の公表には、その2面があって苦しむところである。「珍しい植物に危害を加えると絶滅する」という一般認識が確立する時代にしたいと考えているが、現段階では困難な状況にあると判断している。県内の絶滅危惧種には、このように県内では稀産の種が多く含まれると予想している。

トケンランは上記の稀産の場合と共通し、生育地の詳しい公表は興味をもって収集してみたい人の案内役の結果に至る可能性が大きい。近年はやや流行遅れになって来ている傾向にあるが、野生のラン科植物の収集に関心を持っている人が多く、クマガエソウ、アツモリソウといった大きく見事な花を咲かせる種は、自生地から抜き取られて、ある場所から全滅するという場合も珍しくない。自分の近くで育てて楽しむという人の心理は、特に日本人に多いように思うが、それを止める手段が、現状ではない状況にある。「自然を大切に」ということは、簡単であるが、多くの場合どの様なところを大切にしなければならないのか、実態の把握なしで、看板にかかけたり、文章に書いたり、言葉で表現したりすることが多い。ある地域で細々と生活している植物が存在し、それに改変を加えるとその場から姿を消してしまうので、それを避けるには、どのようにすればよいか、知恵をしばらく保護の方策さぐる心掛が定着して、「自然を大切に」という段階に住民の意識の確立ができれば、無闇に生育地から植物を持出すことがなくなると考えている。

貴重な植物が生えているならば、それを移植して保全したらよいであろう、という発言もよく聞く。ある地域に細々と生育していること事態が、その植物にとっての生育条件であるのに、移植をしてそれと全く同じ条件を作り出すことは、多分現在の人の力では無理であろう。貴重な植物が生育している場合は、その生育地をそのまま残す方向で取り組み、計画変更することが望まれる。

稀産種とその保護の問題は、トキを保護しようという考えかたと共通するはずであり、2000年を迎えたことでもあり、これからの将来、人間と野生の植物との関係は「野生植物に遠慮してヒトが生きて行く必要がある」という認識を会員一人一人が一般の人々に普及して頂きたいと願っている。